Osaka University Knowledge Archive

Title	盲導犬候補犬と飼育者の社会的相互作用に関する行動研究
Author(s)	甲田, 菜穂子
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41988
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【3】

氏　　名	甲　田　菜穂子（こう だ なおこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学 位 記 番 号	第　15113　号
学位授与年月日	平成12年 3 月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科行動学専攻
学 位 論 文 名	**盲導犬候補犬と飼育者の社会的相互作用に関する行動研究**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授　南　　徹弘 （副査） 教 授　柏木　哲夫　　教 授　日野林俊彦　　助教授　中道　正之

論 文 内 容 の 要 旨

1．研究の目的

盲導犬に要求される行動特性として、穏和であること、視覚障害を持つ使用者と複雑で円滑な社会的相互作用を行う能力などが必要である。しかし、ヒトとイヌがどのような社会的相互作用を行い、イヌの行動特性が形成されるかについてはほとんど調べられていない。本研究の目的は、盲導犬育成におけるヒトとイヌの社会的相互作用を観察し、ヒトとイヌの心理的関係を明らかにすることである。

2．飼育者の候補犬に対する発話

盲導犬の候補犬を一般家庭で育てる委託飼育期間に候補犬と飼育者の遊び場面を縦断的に観察した。委託飼育は、候補犬が飼育者と絆を結ぶ社会化期から、様々な環境に慣れる若年期を経て、訓練が開始される成犬期の初めに及ぶ。ここでは、飼育者の候補犬への発話分析から、飼育者が候補犬にどのような関わりをするか、またその関わりが候補犬の発達に伴いどのように変化するかを明らかにすることを目的とした。観察対象は、関西盲導犬協会の候補犬10頭（レトリーバー種）とその候補犬を最も世話した飼育者の成人女性10名であった。行動観察は、候補犬の2カ月齢から12カ月齢まで1カ月につき2回、各飼育者宅で行った。候補犬と飼育者の遊び場面を各回20分間、VTRカメラを用いて撮影した。分析ではビデオ映像を再生し、飼育者が候補犬に向けた発話を記し、各単語の生起頻度を算出した。

候補犬との遊び場面において飼育者は、候補犬の月齢にかかわらず、候補犬の名前を呼び捨てるか、「ちゃん」付けや「あんた」といった二人称で候補犬を呼んだ。飼育者は候補犬に家族内や親しい者同士で使う「お母さん」などという家族の中で最年少の子どもからみた家族内での地位を表す単語を発した。飼育者は、候補犬の月齢にかかわらず、候補犬を「仔／子」（例；いいこ）と表現し、幼児語やしばしば幼児に対して用いられる接頭語の「お」（例；お耳）を用いて候補犬に話した。飼育者は候補犬を自分と同等かそれ以下の社会的地位を持つ、こどものような家族の一員と捉えていたといえる。

3．候補犬と飼育者の遊び

候補犬と飼育者間の親和的な社会的相互作用として、候補犬と飼育者の協調遊びの特徴と候補犬の発達に伴う協調遊びの変化を分析した。分析に使用したビデオ映像は、発話分析で用いたものと同じであった。分析ではビデオ映像を再生し、協調遊びの開始と終了時刻、遊びの種類を記録した。

協調遊びの総時間には候補犬の発達に伴う変化は見られなかったが、飼育者とおもちゃを共有する遊びの生起時間

は、候補犬の発達に伴って長くなった。この遊びは大切な物を愛着対象者と分かち合うことであり、候補犬と飼育者の協調性を強く表す行動である。荒っぽくじゃれる遊びの生起時間は、候補犬の発達に伴って短くなった。候補犬の集中力が要求される、おもちゃを探す遊びの生起時間は、候補犬の発達に伴い長くなった。穏やかでヒトとの社会的相互作用能力に優れるという盲導犬に必要な行動特性は、訓練前の候補犬と飼育者の協調遊びの中にも見い出され、候補犬の発達に伴ってよりはっきりと表出されるようになった。

4．候補犬のいたずら行動と飼育者の対処行動

候補犬のいたずら行動と飼育者の対処行動にはどのような行動が生起し、それらの行動は候補犬の発達に伴ってどのように変化するか、またいたずら行動の対処にはどのような行動が効果的であるかを検討した。分析に使用したビデオ映像は、発話や協調遊び行動の分析で用いたものと同じであった。分析ではビデオ映像を再生し、候補犬のいたずら行動の開始と終了の時刻、いたずら行動の種類、いたずら行動の最中と終了後15秒間の飼育者の対処行動を生起順に記録した。

いたずら行動の生起頻度といたずら行動が連続して生起する割合は、候補犬の発達に伴い減少した。候補犬と飼育者の社会的相互作用は、候補犬の発達に伴っていっそう親和的になった。飼育者のどの対処行動が候補犬のいたずら行動をとめやすいかを調べると、いたずら行動のうちの吠えや唸りに対しては、気をそらせようとしたり、直接やめさせようとする行動は効果がなく、反応しないという行動には効果が見られた。候補犬が飼育者を咬んだときは、気をそらそうとしたり、言葉をかけたり、押さえつけたり、物を提示したり、遊ばせようとする行動は効果がなく、関わりを避ける行動には効果が見られた。候補犬が吠えたり唸ったり飼育者を咬むときは、候補犬に関わることが候補犬にとって報酬となるために、飼育者は候補犬と関わらないことが、これらのいたずら行動を抑制する上で効果的であると考えられた。一方、候補犬が物を傷つけるときは、言葉をかけたり、押さえつける行動は効果がなく、直接やめさせたり、反応しない行動には効果が見られた。候補犬が物を傷つけるときは、候補犬と飼育者の関係が希薄なときであり、飼育者が候補犬に関わることも効果的であると考えられた。

5．候補犬と飼育者の社会的相互作用と訓練結果

観察対象となった候補犬10頭中、現在までに5頭が盲導犬あるいは繁殖犬として選択された。1頭は訓練士から行動特性上の問題で盲導犬として不適であると判断された。ここでは、飼育者と候補犬の社会的相互作用が、後の訓練結果に影響を及ぼしたかを検討した。盲導犬あるいは繁殖犬になった候補犬とその飼育者5ペア、盲導犬として不適であると判断された候補犬とその飼育者1ペアの行動の違いを明らかにするために、これまで分析した行動の生起量の個体差と個人差を調べた。

盲導犬あるいは繁殖犬になった候補犬とその飼育者のペアでも、好ましくない行動は候補犬の発達に伴って減少したほかは、ペア間に大きなばらつきが見られた。盲導犬として不適であると判断された候補犬とその飼育者は、どの行動項目においても特異な値を出したとはいえず、盲導犬として不適である行動特性の萌芽は、本研究が扱った行動項目では明らかにならなかった。しかし、このようなケース研究は、育成プログラムを検討する上で重要であるといえる。

6．訓練犬とヒトの社会的相互作用

委託飼育を終了し盲導犬訓練を受けている訓練犬が、一般人と否定的な関係を持たないことは、盲導犬育成にとって極めて重要である。訓練犬と一般人を実験的に出会わせて、訓練犬の性、ヒトの性と年齢が訓練犬とヒトの社会的相互作用に及ぼす影響を調べた。被験体は避妊または去勢された訓練犬、オス6頭とメス6頭（レトリーバー種）であった。被験者は、一般の成人女性20名、成人男性14名、少女10名であった。被験者が1人でいる実験室に訓練犬を1頭導入し、訓練犬と被験者の社会的相互作用をVTRカメラを用いて撮影した。各被験者につき、メスとオスで2試行の出会わせを行った。分析ではビデオ映像を再生し、訓練犬と被験者の行動の生起を5秒ごとに記録した。

メスはオスよりも頻繁に成人に接近し、身体を接触させた。訓練犬は成人男性より成人女性に頻繁に身体を接触させたが、成人男性は成人女性よりも、訓練犬に頻繁に身体を接触させた。少女は成人女性よりも、訓練犬に一方的に関わることが多かったが、訓練犬と相互交渉に至ることは少なかった。盲導犬育成のために繁殖し、育て、手術によって中性化しても、訓練犬のヒトに対する行動は訓練犬の性の影響を受けることが明らかになった。被験者の性と年齢も被験者と訓練犬の社会的相互作用に影響を及ぼした。

7．まとめ

飼育者は候補犬を擬人化、幼児化し、家族の一員のように捉え、候補犬と飼育者は協調して遊ぶことができた。これらの行動の生起量には、候補犬の発達に伴なう変化が見られなかった。つまり、候補犬と飼育者の基本的な親和的関係は、委託飼育が開始されるイヌの社会化期に形成され、委託飼育中は安定して維持されるものであった。ただし、候補犬と飼育者は候補犬の発達に伴って荒っぽい遊びをする時間を減少させ、遊びを続けるための集中力や相手との協調性を要する遊びに費やす時間を増加させた。候補犬のいたずら行動の生起回数も候補犬の発達に伴って減少した。つまり、盲導犬に必要とされる行動特性が、飼育者と候補犬の社会的相互作用の中で候補犬の発達に伴ってよりはっきりと表出されるようになり、飼育者と候補犬の社会的相互作用はいっそう良好になった。

現在、イヌの行動発達やヒトとイヌの社会的相互作用に関する基礎的知見が不足しており、盲導犬の適性を候補犬の発達初期に正確に予測することは難しい。本研究は、ヒトとイヌの社会的相互作用に関する基礎資料を提供することができた。今後は、盲導犬育成において長期間に渡るイヌの行動発達過程の解明、遊びや出会わせ場面以外でのヒトとイヌの社会的相互作用に関する研究などを進める必要がある。

論文審査の結果の要旨

イヌはペットとして、また盲導犬、警察犬等様々な用途において人間と密接な関わりを持つ動物種である。とりわけ盲導犬は、その社会的使命の重要性から育成の効率化への期待が高まっている。しかし、イヌの行動研究、特に人間との関わりにおける行動研究は未開拓のままであり、イヌと人間の関わりを様々な視点から研究することが必要である。本研究は、盲導犬の候補犬および訓練犬の人間との社会的関係の発達過程を明らかにすることを目的として、縦断的研究法から得られた多量の行動観察データを詳細に分析したものである。

候補犬研究の結果において、候補犬の飼育者は、候補犬を擬人化・幼児化し家族のように捉え、協調的に遊ぶことが明らかにされた。候補犬と飼育者の基本的な親和関係は、委託飼育が開始されるイヌの社会化期に形成され、委託飼育中は安定して維持された。一方、人間と穏やかで協調的なかかわりあいができるという盲導犬に必要とされる行動特性は、飼育期間中によりはっきりと表出されるようになった。また、いたずら行動と対処行動の分析からは、いたずら行動に対する効果的な対処法も明らかにされた。さらに、人間と訓練犬の社会的相互作用の研究からは、身体接触や相互交渉に、訓練犬の性別、人間の性別と年齢も影響を及ぼすことが示された。

本研究成果から、飼育犬や訓練犬を盲導犬へと向上させる上で行動研究の必要性と重要性が示された。このように本研究は盲導犬育成に関する基礎的資料を提出するとともに、ヒトと動物の関係学における新しい研究分野を切り開いたパイオニア的研究としても将来への発展を予想させる研究であった。

以上の内容により、本審査委員会は本論文が極めて優れたイヌの行動発達と盲導犬育成に関わる研究であることを評価し、博士（人間科学）の学位の授与に十分であると判定した。